

どんなことだって、
いいんだと思う

小鳥遊涼

相変わらず、私の回りはゆったりとした時間が流れている。それは、とても退屈なものだ。私は毎日何が起るのか分からないような、サプライズがあればいいなと思っている人間だ。それがスリルなことでも、ファンタジー的なことでも、それは構わない。私は短気だから、何も変わることに無い日常が、退屈なのだ。このまま、学校へ行き、授業を受け、卒業し、社会人として仕事に就く。それは当たり前なこと。だけど、それが当たり前になってしまったこの世界の生き方が、つまらない。本当ならば仕事なんかしないで、世界一周旅行をしてみたり、魔法や超能力が使えることを夢見てひたすら研究したり、それが認められないとわかっていても、してみたい。だけど、そんなことが許される訳もない。そんなことをしたら、人々に白い目で見られることくらい、わかっている。するべきことが既に決まってしまった、それが当たり前だと客観的になってしまったこの世界は、私にとってはもの凄くつまらない世界だ。どうして、自分の人生を、たった一度きりの人生を、誰かが決めたのは知らないけれど、それに従うように生きなければならぬのだろう。したいことをしてはいけないのだろうか。勿論、人を不幸にするようなことはしない。それはいけない。でも、未練を残したくないから。こうして生きていくこと自体が奇跡なんだから、死ぬまでに出来ることをしたいというのは、決しておかしいことじゃないはず。

でも、わかっている。それは間違っていることぐらい。私が、この社会に順応できていない、十六歳にもなって未だに夢見る子供だということぐらい、自覚はある。だから、私はこの世界にしっかりと溶け込み、生きていこうと思っている。その中でも、したいこと、やってみたいことだってあるはずなんだから。うん。本当は、

さっき述べたようにしたいんだけど。

「……眠い」

授業中は、意識しなくても自然とあくびが出る。これは、人間の反射という現象の影響なのだろうか。簡単な例をあげると、熱いもの触れた時、咄嗟に手を離すあの動き。自分の体調を知らせる、自分の状況を守るための行動。ということとは、この授業は私の体に悪いもの。なんてことはない。私が受ける意欲がないだけのこと。実際、ほとんどのクラスメートはちゃんと授業を受けているし、授業サボって寝ているのは決まって順位の低い、勉強する意欲が全く見られない奴。そうになると、当然私はその一人となる訳だ。

「ふわぁ〜」

ああ、眠い。困ったな。授業中なんか眠ったりでもしたら、授業の評価が下がり、成績に関わってしまう。こう見えても、私はそれなりな成績で来ている。授業のノート取って、一通り勉強すれば、それなりな結果が付いてくる。そうやって、今こうして出ているマイナスの状況を相殺してきたんだ。今までだって、頑張ってる。眠らないようにしてきたじゃないか。私なら出来るさ。

そうなるよ——ここはいつものやり方でいくか。と言っても、真面目に授業を受けるってだけなだけだ。そして、授業終了。教科が数学だったので助かった。問題が結構難しかったので、それなりに暇つぶしになった。問題を解くことも出来たし、変にあとに引きずるようなこともない。

机の横に立ちあがり、思いっきり背伸びを試みる。だいぶ体が固くなっていたのか、自分の体の中で何度か鈍い音が聞こえた。

「葉音ちゃん」

私を呼ぶ声。この声は——

「知香か」

「何よ、私じゃ不満？」

「誰もそんなこと言っていないよ」

この子は、徳本知香。私の友達である。小学校から仲良くなった知香とは、同じ高校に通っている。ショートヘアに、正面から見て左側に髪留めで髪を留め、おでこが見えるのが特徴。髪留めは毎日替わりで、決まって動物もの。高校生になりながら、それはどうかというものがあるのだが。

「今日は猫か」

「ピン？ これ、新しいやつなんだ」

そう言って知香はピンに手を当てる。可愛い猫がにっこりと微笑んでいる。

「……それ、そろそろ卒業したらどうかな？」

「えーなんでー！ 可愛いじゃん！」

「いや、可愛いけどさ」

「いいのです。私が気に入っているんだし、誰にも迷惑掛けてないし。」

「まあ、そうだね」

そうだ、知香が好きなのを、私が咎める理由なんかない。いいじゃないか、本人がそれで満足しているならば。

あ、自己紹介、まだだった。私は、片平葉音。はのんって読む、結構珍しい名前。名前以外は普通の女子高生。

「で、どうしたの？」

「そうそう、今日の放課後、空いてる？」

「うん、空いてるよ。そもそも、知香は私が何も部活入ってないの、知ってるでしょ？今はバイトだってしてないのよ」

私は帰宅部だ。この高校は全入部制ではない。どこか入りたい部活も無かったから、どこにも入っていない。バイトは先月までコンビニでしていたけれど、辞めてしまった。特別、お金を必要としている訳でもなかった。何もしていないのもよろしくないかな、という考えからバイトを始めた。約一年ぐらいは働いていた。

「歸りに、本屋さんに寄っていかない？」

「本屋？ どうして？」

「今日、発売になった小説があつてさ。それを買いに行こうと思って」

「また？ この前買ったばかりじゃん」

知香は本が大好き。小さい頃から、本を読むことが大好きだったらしく、今まで読んだ本の数は、数百冊にもなる。私なんか、十冊も読んでないというのに。それもあって、将来は小説家になるのが夢なんだそう。小説家、とはいってもいろいろなジャンルがあるが、特にライトノベルとかいうジャンルの小説家になりたいそう。うだ。

「どう？ 一緒に行かない？」

「うーん、どうしようかなあ」

「本屋だけじゃなくて、他にもいろいろ寄って遊んで行こうよ」

「……わかった、行く」

「やった！」

手を挙げて喜ぶ知香。そんな大げさにしなくてもいいのに。

「ねえ……」

「ん？」

そこには、理子がいた。春宮理子。この子も私の仲の良い友達。理子も小学生から付き合いがあるけど、結構な恥ずかしがり屋。こうやって、いつも小さい声で話し掛けてくる。エクステを付けていない、背中まで長く伸びたロングヘア。前髪も目が隠れてしまうぐらいまで伸びている。

「一緒に行きたいの？」

「う、うん……」

「なら理子も行こうよ。ね、知香？」

「全然OKだよ。理子ちゃんも一緒に行こう！」

「う、うん！」

さっきまで不安そうな顔をしていたのが一変、嬉しそうに、にっこりと笑顔を見せた。自分を素直に出すことのできない理子。小さい頃に両親が自己で亡くなり、施設によって育てられてきた。今も施設に住んでいる。そのせいもあってか、人と話すのが苦手で、人見知りも激しい。私達も、最初はコミュニケーションを取るのに苦労した。しかし、今はこうして——
いや、まだ克服出来ていないかもしれない。だけど、仲良くなっている。固くならないでいって、毎回言っているんだけど。でも、話によると施設内では普通に話すし、人見知りもないらしい。赤の他人には、うまくコミュニケーションが取れないだけみたい。

「知香ちゃん……また小説買うんだ」

「うん、今回は、結構お気に入りシリーズの最新刊だからさ。本当ならば今からでも買いに行きたいんだけど」
「知香ちゃん、本当に本が好きなんだね」

「まあねー。あ、絵のほうはどんな感じ？」

「うん、いい調子だよ。三日もすれば、だいたい書き終わるよ」

「ほんと？いやぁ、理子ちゃんみたいな絵の才能があるお方が友達で良かった」

「そ、そんな。褒めるほど上手くないよ」

いや、知香の言う通り、理子の絵の才能は凄い。絵のことなんか何も知らない私でさえも凄いやと思うのだから。マンガの絵だけでなく、風景画や肖像画といった美術分野の才能も凄い。現にいくつものコンクールで賞を貰っている。その度に全校集会で校長先生から賞状の受賞をしているのだが、いつも顔を真っ赤にしている。こちらは緊張で倒れないかと、いつも心配になってしまふ。

そんな理子は、知香の小説の挿絵を請け負っている。知香曰く、『いくら文章力があっても、最初に見るのはどうしても見た目。つまり絵』ということがあつらしく、絵が上手い理子に手助けしてもらっている、という訳だ。

「これで今度の即売会も安泰ですな、アッハッハッハ」

「全く、知香は……」

呆れながらも、これが知香のいいところでもあるのだ。何より元気と笑顔を絶やすことがない。こうしてい

つも、回りの人々を笑顔にする知香。辛いこともあるだろうけど、知香は人の前で悲しい顔は絶対に見せない。それに関しては、私的には良いことであり、悪いことでもあると思つている。自分の辛い時ぐらひは、他人のことは他所において、自分のことも心配してほしいと思うんだ。

「おやおや、みんな集まって何をしてらっしゃるのかな？」

「今度は誰だ？」

次から次へとやってくるので、ふと投げやりな言葉が出てしまった。

「あたいだよ、メルだよ」

ほっほっほ、と老人のような笑いをするメル。あ、メルっていうのはあだ名。名前は秋島芽留亜（めるあ）。私と同様、珍しい名前だ。この子は成績優秀で、常にテストでも上位五本の指に入っている。長いポニーテールに身長一七五センチの長身。成績優秀、かつ運動神経抜群。天は二物を与えるというのは、メルのことを言うのかもしれない。特徴として、メルのしぐさ、話し方は妙に年寄りっぽい。

「若い物が集まっているもので、何をしているのかと気になったもので」

「アンタも若いでしょうが」

私達、三人同時につっこんだ。

「ああ、そうじゃったな」

「メルも一緒に本屋に行かない？」

知香がメルに行った。メルは状況をすぐに飲み込んだらしく、うんうんと頷く。

「また書物あさりに行くのか？」

「そういうこと」

「お主も好きよの〜」

こんな話し方をするメルだけど、実はこの中で一番女の子っぽい。何より可愛いものが大好き。実際、メルの部屋には沢山の人形が置かれている。私生活もそうだが、こうしているメルしか知らない人が、もしメルの女々しい姿を見た時は、あまりのギャップに言葉を失うに違いない。クラスメートは知っているけど。そうだな、例えば……

「……ねえ、メル」

「何かね？」

「あの……襟に……毛虫が付いてるよ……」

「いやあ〜！取って取って〜！ 怖いよお〜！ やだやだやだ！」

こうやって思いっきり女の子の話し方に変わり、ついでに声も甲高い子供のような声に変わるのだ。一体どこらが本当のメルなんだろう。

「あの……メルちゃん……」

「理子ちゃん、早く取って！怖いよー！」

目には涙が浮かんでいる。少々やりすぎたか。

「メルちゃん。毛虫、付いてないよっ」

「……えっ？」

知香が冷静にメルに言う。メルは呆然とした表情になる。

「……ほんとにっ？」

「うん。ほんと。ほら」

知香は、メルの襟のホコリを取り払うように、手でなぞっていく。

「……ね？」

「ほ、ほんとだ……」

メルは安堵の表情を見せる。が、一瞬にして私を見ると、再び目に涙を浮かべながら、凄まじい眼光を向ける。

「酷いよ、葉音ー！本当に怖かったんだからねー！」

「ご、ごめん。つい遊び心で……」

「遊び心じゃないよー！本当に怖かったんだからねー！」

私の体をバンバン叩きながら怒るメル。お分かり頂けたでしょうか？これがもう一人のメルなのです。正直、多重人格なんじゃないかって思っている。

「本当にごめん。今度、ジュース奢るから……」

「もう……」

メルは私の体から手を離し、服の袖で涙を拭いた。そして次の瞬間、

「全く、葉音は子供だなあ。まあ、許してやるか」

普段のメルに戻った。本当に不思議だ。

「……もう、誰も来ないよね?」

私は回りを見渡す。うん、もう大丈夫みたいだ。

「何を警戒してるのよ」

「いや、特に何もないんだけど」

「……変な葉音」

知香に何を言われようとも、ただ笑って誤魔化すしかなかった。

「じゃあ放課後、また葉音の机に集合ね」

「了解」

「は、は、」

「御意」

知香の呼び掛けに返事すると、授業開始のチャイムが鳴った。三人は私の机から離れ、各自の机に戻って行

った。

「……結局、いつものメンバーか」

外で空を自由に飛ぶ鳥を見ながら、私は呟いた。

「それじゃ、行きましよう」

放課後、私の回りにみんなが集まり、知香の呼び掛けと共に本屋へと向かった。カバンを手に取り、教室を後にする。

「……眠い」

「葉音ちゃん……それ口癖みたいだね」

「そ、そう?」

「だって、毎日、一日一回は眠いって言っている気がする」

理子の洞察力は凄いな。私は全く意識してないのに。

「あ、もしかして、葉音は眠り姫?」

「眠り姫?なんじゃそりゃ?」

「眠りの森の美女じゃよ。知っておるか?」

メルの言っていることがさっぱり理解できなかった私は、何も言わずに首を傾げる。

「ヨーロッパの古い民話、童謡じゃよ。邦名では、眠り姫、茨姫というタイトルでも知られているかな」

「ああ、それでか」

「それだけじゃないよ？ それって結構、おいしい属性だよ？」

「属性？」

「……それ、小説の世界のことでしょ？」

「そうそう。ファンタジーものでは、何かと物語のカギを握る姫様は眠り属性が多いからね。まさか現代にもそんな人がいるとは……」

「私は一般人だ！」

何を言いつ出すかと思えば。まあ、知香らしい考えだ。

そんなやり取りをしながら、校門抜け、本屋を目指す。

「しかし、知香は夢があるな」

「うん。絶対に小説家になるんだ」

「……知香ちゃんなら、なれるよ」

「ありがとうー理子ちゃん！」

そう言って理子を抱きしめる知香。抱きつかれると同時に、理子の顔が赤くなっていった。

「……どうして、そんなに小説家になりたいんだ？」

私は知香に問う。本が好きなら、読むだけでもいいんじゃないか。

「どうして？ それはね……」

知香は理子から離れ、普通に歩きます。理子は、よほど恥ずかしかつたらしく、顔を真っ赤にしたまま下を向いて歩いている。

「いろいろ、出来るから」

「いろいろ？」

「うん。小説ってさ、要は空想、妄想世界の物語じゃない？ 自分の出来ないこと、自分の望んでいることを、そこで起こすことが出来る、今の世界で、唯一の場所だと思うんだ。それは結果として、自分の望んでいることにしか辿り着かないんだけど、それでも自分の思うことが何でも表現出来る場所なんだ」

「自分の、思いねえ……」

確かにそうかも知れない。小説には、現実でもあることも、現実ではありえないとも、ごく自然に実現している場所だ。それはその人がそうあってほしいと願う、もしくはそうだった時のことを仮定した自分なりの世界の流れを表現出来る場所かもしれない。

「ほら、私って結構ロマンチストなところあるじゃない？ だから、私にとって小説家っていうのは、それをすべて可能にしてくれる最高のものなんだ。小説家になれなくても、書くことは止めないと思う。仕事しながらだって、出来るから」

「そっか……」

しっかり自分の目標が定まっている知香が、とても羨ましいかった。それを目指して今後の人生を送るということは、それだけでも生きるエネルギーになるのだから。

「まあ、今はまだ未熟者だから」

「そんなことないよ。知香なら、きっと凄い小説家になれるよ」

「ふふっ、ありがと。」

そう言って、知香は私に微笑んだ。

「理子は、やっぱり画家とかになるの？」

「私？ 私は……」

理子は、しばらく考えこんだ。数分間の間だけ、沈黙が流れた。聞こえる音と言ったら、歩く足音と車のエンジン、回りにいる人々の話し声ぐらいだった。

「……保育士、かな」

「保育士？」

「うん。私、子供が好きだから。ほら、保育士になっても、紙芝居とかに絵を描けるじゃない？ それに、仕事をして、知香ちゃんの絵を描くことで、ちゃんと絵を描くことを続けられるし」

なるほど。理子もしっかりしているな。子供が好きなのは知っていたけれど、それを将来の目標に結びつ

けている。そんなこと、一度たりとも考えたことはない。

「保育士って、実際は大変なんだ。給料も少ないし、他の子供の世話をしている訳だから、苦情も多いんだって。正直、それに対応できる自信はないんだ。それでも、やってみたいんだ」

「へえ……」

理子にとって、人と関わる仕事なんて自分の一番苦手とすることなのに……。それでもチャレンジしようとするのだ。私なんかより、ずっと強い人間だ。逃げることも無く、立ち向かおうとしているのだから。

「あたいはだね……」

「メルも何かあるの？」

「もちろん。あたいにも夢はあるさ」

「それで、何？」

「あたいは、海外に住みたい。それで、そこで働きたいのだ」

「……えっ？」

海外に住みたい、ということは何もおかしなことではない。ただ、似合わなかった。時代劇のセリフを喋っているかのような口調のメルが、海外だなんて。それこそ、能や雅楽、お茶や川柳といった日本文化の道へと進むものだと、思いこんでいた。

「特にヨーロッパあたりに住んでみたいかな。イタリアとか、フランスとか」

「うーん、思いく浮かばないなあ……」

「失敬な。あたいがヨーロッパに住みたいということが、変なことだと申すのか」

「だって、口調が。」

「生まれつき、こうなのだ！」

「そ、そうだよね。ごめん」

「ま、まあそれはいいか。どうであれメルだって、目標はあるのだ。それはそれでいいことなのだから、いいじゃないか。」

「そんなことを言っている葉音は、何かあるの？」

「私？私はね……」

「知香に言われて、私は戸惑った。だって、何も無いのだから。あるにはあるけど、それは現実的なことでは、ないから。」

「そうだね。ハッキリ言うて無いね」

「無いの？ 何も無いの？」

「うん」

「将来……してみたいこととかは？」

「無い」

「あたみみたいに、どこかへ行ってみたいとかは無いか？」

「無い。何も無い」

「悲しいことではあるけど、本当に何も無いのだ。現実的なことに関しては、何も。」

「うーん、そっかー。まあ、いつかは見つかるさ」

「そう、願いたいものだね」

「投げやりな感覚で、私は言った。」

「無理矢理見つける必要もないと思うよ。私だって、最近になって思い始めたんだし」

「そうかな」

「そうだよ。心配することないから」

「そんな心配するようなことはないとは思うのは、私だけだろうか。」

「そうしているうちに、私達は本屋へと着いた。この本屋は、個人経営のお店。特別大きいことも無い。いたって普通の本屋だ。新刊もちゃんと仕入れているので、古いのしか置いてないなんてこともないので、人はそれなりに入っている。」

「知香は本屋へ入ると、足早に新刊コーナーへと向かった。」

「あったあった！ これこれ！」

「目的のものを手に入れるや、くるくる回って喜ぶ知香。本当に好きなんだな。なんか羨ましいな。没頭でき」

るものがあるなんて。

「もう少し物色したいから、みんなはなんか見てて」

そう言って、知香は小説コーナーへと向かった。まだ買うつもりなのか。

「私は、参考書見てくるね」

「あ、う、うん」

「あたいも行くこう」

理子とメルは、参考書コーナーへ。私は一人、残されてしまった。

「……どうしようかな」

小説は、途中で投げ出すだろうし、参考書なんか買いたいとも思わない。雑誌も特別見たいのものないし。フ
アッション雑誌は、この前、目を通しておいたから読む必要もないし。

「……眠い」

大きなあくびが自然と出る。そして気がつく。ああ、これは口癖だ。自分で言った後に思った。いつか、本
当に眠り姫なんてあだ名が付いてしまいそうだ。

「とりあえず、適当にぶらついてみるかな。」

じっと立っているのも、何かと嫌だったので、適当に歩き回ってみた。

見ていて思うのは、いろんな種類の本が存在するってこと。一体、世の中には何冊の本が存在するのだろうか。

私に読めるような本が存在するのか。あったとしても、それはマンガだけだろうけど。

途中、三人の横を通りかかったけど、みんな本を開いては、真剣な眼差しで小さな文字とにらめっこしている。
私が通りかかったことも気づかないくらいだから、真剣なのだろう。

「……眠い」

これで何回目だろう。あくびをしては、こればかり言っているな。正直、もう帰って寝たい気分だ。参っ
たな。私には、今の状況が辛い。ハッキリ言って、暇だ。どうしようかな。ああ、またあくびが……

「葉音ちゃん？」

「うわっ！」

不意打ちだったので、思わず大きな声をあげてしまった。回りの視線が私に向けられる。

「あ、あははは……」

適当に笑って誤魔化してみる。二、三秒私を見た後、視線はすぐに先程まで向けられていた場所へと戻った。

「……はあ。ごめんね、理子」

理子を見ると、顔を真っ赤にして、下を向いていた。

「ご、ごめんね。恥ずかしかった？」

「……うん」

そうだよ、理子はこういう状況には弱いんだもん。何か悪いことしたな。

「大丈夫？」

「うん……ごめんね、いきなり声掛けたりして」

「誤ること無いよ。私が大きな声出しちゃったんだから。ところで、メルは？」

「メルちゃんは、まだ参考書見てるよ。イタリア語の」

「イ、イタリア？」

難しいものを見ていらっしやるようで。それも将来のため、ということなのでしょうが。

「葉音ちゃんは、何か見ていたの？」

「ううん、特に何も見てない」

「そうなんだ……だったら、あそこに行ってみる？」

「別にいいけど、どこ？」

「ついて来て」

そう言って、理子は歩き出す。私は、理子の後を付いていった。その場所は、歩いて五歩ぐらいの場所だった。

「……」

「うん」

そこは、文庫コーナーだった。いろんなジャンルの本が本棚の隅々まで収納されている。

「ここには、いろんな悩みを解決してくれる本があるんだよ」

「へえ……」

「葉音ちゃん、夢とか、やりたいこと無いて言ってたじゃない？だから、ここにそれを見つけることが出来るヒントになる本があるかなって思ってた……」

「そうなんだ……ありがとう。探してみるね」

せっかく理子が私のために連れて来てくれたのだ、恩に報いるようにしなければ。私は、一冊一冊本の題名を見ていった。会社の設立のしかた、片つけをうまくするには、どうして宇宙人は人の前に姿を現さないのか、など幾多の種類の本が存在している。

そして、見つけた。生きることを楽しみを見つける、という本。私が物色する中では、この題名が一番しっくりきた。なんかいい気分ではないけど。

理子も何か読んでいるらしい。こっそり、横から中身を覗いてみる。内容は、人との関わる方。うん、納得だ。

私は、本を棚から取り、読み始めた。生きるとは、何か？こんな文章から始まるこの本は、何か重いものを私に感じさせた。ササッと流すように読んでみた。

『何かしら、夢中になれることを見つけることは、自ら探そうとしてもなかなか定まらないもの。興味があれば話は変わるが、何も無い時に、穴埋めをするように趣味や目標を定めたとしても、それは絶対に続かない。続ける意味が無いからだ。それは、自分を誤魔化していることに他ならない。それを見つけることは、容易なこと』

ではない。無理に探すのではなく、それ以前に自分を見つめ直さなければならないのだ——』
わからない。何が言いたいのだろう。私がバカなのか？それとも、これを書いている人が、意味もなく論理的なだけなのか？

「……はあ」

私は、読むのを止めた。ハッキリ言って、疲れる。やっぱり、私には無理だ。

本を元の場所にしまい、理子を見た。相変わらず真剣な表情で本を見ている。よく出来るなど感心するばかりだ。理子は、私が読み終えた……訳じゃないな、私が理子を待っているのに気付き、本を元の場所にしまった。

「どう？ 何か見つかりそう？」

理子が良い結果を期待しているのか、少し微笑みながら言ったその言葉に、私は悪いことをしたと少し後悔した。

「うーん……特に無かったかな……」

正直な気持ちを言った。

「そっか……。まあ、急がなくても大丈夫だよ。きっと見つかるよ」

「う、うん」

私を必死に励まそうとする理子。せっかく理子が私のためにしてくれたことだったのに。私は罪悪感を覚え

た。

自分のしたいこと。それは、どんな些細なことでも構わないと思う。でも、私にはそれが無い。興味が無い、動こうとも思わない。何でなのかな。みんなには、しっかり目標があるっていうのに。わからないな——

結局、その日は何も得るものはなかった。知香が本を買った後、いつものファミレスで食事を取り、帰りにゲームセンターに寄って少し遊んだ。家には八時頃に着いた。さっさと寝支度を済ませ、自分の部屋へと向かった。

「ふう……」

特別変わったものを置いていない、ましてや必要最低限の物以外、何も置いていない素朴な私の部屋。タンクス、クローゼット、小さなテーブル、そしてベッド。これ以外は何も置いていない。友達からは、『これ、本当に部屋？』と言われるほどに何も置いていない。テレビさえ置いていないから、部屋に入ったとしても、ただ寝るぐらいしかない。

時間は十時。寝るにはまだ少し早い。とは言っても、することがない。リビングに言ってテレビを見ようかと立ち上がるも、すぐに止めた。見たいものが無いからだ。私は、ベッドに身を投げるようにして横になった。「私って、つまらない女なんだろうか」

今日の私は、少し自己嫌悪に陥っていた。どうしてこうも、私は関心意欲に欠けているのだろうか。何だっ

ていいじゃないか。将来の目標どころじゃない。したいことがない。スポーツ、音楽、芸術、マンガやゲームでも何でもいいのに。何もやる気にならない。

自分は、どうしたいのだろうか。自分は、何なのだろうか。自分が分からなくなってきた。いけない、ごんごん深みにハマっていきそうだ。

「寝よう」

私は布団に潜り、早々と眠りにつくことにした。眠れば、とりあえずはこのブルーな気持ちは消えるだろう。そうすれば、忘れることが出来る。

こうして——また、何も変わらずに生きていくのだろうか——

どうしたことか。これは何かのいたずらなのか。いや、仕組まれたのかもしれない。おかしいでしょ、これ。私に対するイジメ？この年齢になって、この課題はごうなの？これが宿題だと？馬鹿馬鹿しい。小学生レベルにも程がある。だって、あまりにもタイミングが良すぎるでしょ、これ。

「ねえねえ、葉音」

知香がニコニコしながら話しかけてくる。その笑顔は、間違いなく確信犯の顔だった。

「何か用かしら、知香さん？」

私はわざとらしく、お嬢様のような口調で返事を返す。知香は、それに応戦するかのように意味もなく高笑いする。

「課題、大変そうねえ」

「ええ、まったくですわ。困りましたわ。知香さんも、さぞ大変なことでしょうねえ」

「いいえ、私はこんな課題、数分で片付きますわよ」

「あら、そうですの……」

知香が言う言葉に、何も対抗する言葉が出てこない。確かに、知香からすれば、こんな課題時間つぶしにもならないだろう。

「ふざけた話ともかく、ごうするのは」

「……ごうしようね」

本当にごうしよう。今の私には、これはごうすることも出来ない。困った。

「おい、葉音」

メルと理子もやってきた。これも私のことを気にして、こちらにやってきたのだろうか……と思いたい。

「……ごう？ 出来そう？」

やっぱりそうだったみたい。理子が心配そうに、私に聞いてくる。

「ハッキリ言って、どうにもならないかも。まあ、最終的には適当なこと書いて誤魔化すから」
「そ、そうだね。とりあえずはね」

理子がすごく心配そうな様子でいるものだから、とりあえずその場しのぎに言っておいた。

「しかし、運命のいたずらっつものものは、あるものなのだな」

「本当、そう思うよ」

思わずため息が出る。

「課題が、将来のこと、だもんね」

知香は、やれやれと言った表情で言った。

「葉音に対する挑戦状のようなものだな」

「それは大袈裟だから」

「で、結局見つけたのか？」

「いや……何も……」

「そうか……」

全員そろってため息をついた。みんなの場合、私に対する呆れたため息なのかもしれない。

「とりあえず、どうにかするから、そんな心配しないでよ」

「そう？ なら、いいだけじゃ」

「無理しないでね、葉音ちゃん」

「いざとなったら、いつでも相談するとよい」

「みんな、悪いね」

ほんと、悪いね。こんな無駄に毎日過ごしている私の心配をしてくれて――

家に帰ってから、自分の部屋に引きこもり、テーブルの上に広げた作文用紙を睨めつける私。書いた文字、たった数文字。

『私の将来の目標は』

これで止まっている。こうして考えて、既に三十分は経っている。しかし、何も思い浮かばない。適当に誤魔化そうと模索してみたが、どうしてそう思ったとなると、答えが出てこない。

いや、答えが無い訳でもない。最終奥儀として、公務員を残している。どうしてかとなっても、その答えはちゃんと出ている。収入が安定しているからだ。これを書いてしまえば、何ら考える必要もない。

が、しかし。これを提出しても、多分書き直しになるのは見えている。『収入云々でなく、自分のしたいことを書けと言ったんだ。』とかなって。そんなのはごめん。だからこうして必死に考えているのだ。

「……あーだめだー出てこないよー」

参った。私は考えるという動作が、どうも欠けているようだ。適当でいいのに、それが出来ない。昔から作

文は苦手だけど、まさかここまでとは……。

「葉音ー、ご飯だよー」

母さんの呼ぶ声がする。もうそんな時間になってしまったのか。

「はい、今行くー」

手に持っていたペンをテーブルの上に置き、部屋を出た。リビングに向かうと、テーブルの上に、夕食が用意されていた。母さんはお茶を飲んでいる。イスに座り、私は両手を合わせる。

「いただきますーす」

今日はシチューだ。ジャガイモ、にんじん、たまねぎ、豚肉。メジャーな食材が具材として並んでいる。当たり障りのない、無難なトッピングだ。

「うん。おいしい」

無難なものなのに、母さんの作る食事はおいしい。これがおふくろの味、というものなのだろうか。

「簡単なもので作っちゃって、ごめんね」

「いや、誤ることないでしょ。本当においしいよ」

母さんも、つい数時間前にスーパーでのパートの仕事を終えて帰ってきたばかりなのだ。文句は言えない。いや、そもそも文句なんかない。

「父さんは、今日も残業なの？」

「そうみたい。こここのところ、新しいプロジェクトが忙しいみたいで」

私の父さんは、玩具メーカー、つまりおもちゃを作る会社の開発部門の課長として働いている。ここ最近、父さんとは朝に顔を合わせるぐらいで、あまり話をしていなかった。新しい商品を販売することになったらしく、開発に日夜追われているらしい。

「大変なんだね」

「でも、販売するようになれば、ある程度は落ち着くでしょ」

母さんは、上品に両手で湯呑みを持ち、お茶飲んだ。私も、自分を落ち着かせるように、お茶を飲んだ。少し渋めだけど、おいしい。

「まあ、落ち着けば早く帰ってくるようになるわよ」

「そうだね」

「ふわぁ。今日も仕事疲れたわ」

「お疲れ様です」

「明日も仕事か。嫌だなく。また、あのマネージャーにうるさいこと言われるんだろうな。肩も痛いし、明日は一日寝ていたい気分だわ」

そう言うど、母さんは大きなあくびをした。仕事というのは、心身共に疲れるものなのだろうか。

「……ねえ、母さん」

「どうしたの？」

「母さんは、何の仕事をしたかったの？」

「何？ いきなり」

「いや、高校の課題でき、将来の夢を書け、なんて言う小学生の課題みたいなものを出されたんだ。将来の夢って言ったら、何かの職業じゃない？母さんの高校生の頃って、何になりたかったのかなって」

「そういうことね」

母さんは、お茶を全て飲み干すと、両肘をついた。私は、シチューを一口食べた。

「そうね……何もなかったわ」

「何も無い？」

「うん。別にしたいことが無かった。やりたい仕事なんか無かった」

母さんも、私と同じように何もしたいことが無かったなんて。

「あんたも、無いんでしょ。やりたいこと」

「うん」

「子供は親に似るものなのかしらね。私の悪いところが似ちゃったみたいね」

「べ、別にそんな風には思っていないよ」

自分を責めるような母さんの発言を、私は慌てて否定した。そんな私を、母さんは苦笑いしながら見ていた。

「そう言ってもらえると助かるわ。でも、どうにかなるものよ。実際、こうして生活しているわけだし」

「まあ、そうだね」

「将来の夢ねえ……」

母さんは、急須から湯呑みにお茶を注ぐ。これで何杯目だろうか。って、そこはどうでもいいか。

「それって、仕事じゃなくなっただっていいんでしょ？」

「えっ？」

思わず、スプーンを持つ手が止まった。

「私もね、あんたと全く同じようなことを考えていた時期があったの。そろそろ社会人になる人間として、目的を定めないといけないなって思っただけ。でも、そう考えた時には、何もしたいことが無かった。いろいろと勘案してみたけど、見つからなかった。何で見つからなかったと思う？」

「何で？」

見つからなかった理由……。私の場合、この世界に作られてしまった客観的な人生に対しての不満だ。でも、母さんがそんな子供じみた理由でいる訳がない。母さんは、何か不満なことがあったのだろうか。

「わからない」

少し考えてみたけど、私には、わからなかった。

「私はね、今、つまりその当時の生活に満足していたからなの。毎日が充実していて、楽しくて。将来のことを

考えることもしないほど、忙しくて。子供だったんだ。自分では、そんな実感はなかった。でも、気が付いてみたら、そうだった。当たり前なことだと思っていたそのことが、実はとても幸せなことだった。楽しいことだった。それがわかってから、私には将来の夢が見つかったわ」

「見つかったの？」

「うん。学生時代の友達と、ずっといつまでも仲良くすることっていう夢が。そして、幸せな生活を送るっていう夢が」

友達と仲良くする……。それが、夢……。

「その夢が見つかったから。私は社会人としての道を探した。その時は、大学生だったから、仕事への道しかなかった。私は、友達と仲良くするって夢のためには、しっかりと会社に入って、お金を稼いで、ちゃんとした生活して。何言ってるんだと思うかもしれないけど、私はそうやって生きてきたの」

「それで、夢はどうなったの？」

「ちゃんと叶ったわよ。現に、今も学生時代の友達と半年に一回は会って、食事したり旅行に行ったり仲良くしているし、結婚して、こうしてあんたみたいな、可愛いくてしっかりした尾ごもを授かって、幸せになれた」

「そ、そう……」

ニコニコしながら言う母さんの言葉に、私は恥ずかしくなった。誤魔化すかのように、私はシチューを食べ

た。

「まあ、焦ることはないと思うよ」

「だから、宿題なんだって」

「ああ、そうか」

「でも、私と似た立場にいた母さんに相談して、何とか見つかりそう。ありがとね」

「どういたしまして」

そう言うと、母さんはお茶を飲んだ。

「はい、それでは宿題を後ろの人、回収してきてー」

現代文の終わりに、課題となっていた『将来の夢』の回収がされた。私も、何とか書き終え、期間に間に合わせる事が出来た。母さんに聞いてよかった。回収する人に、作文用紙を渡す。ちょうどチャイムが鳴り、先生が教室を出て行った。それと同時に、知香、理子、メルが私の机の回りにやってきた。

「ねえ、どうだったの？書けたの？」

知香が聞いた。理子、メルも心配そうに私の返事を待っている。

「ちゃんと書けたよ。心配してくれてありがとう」

その言葉を聞いた三人は、安心した表情を見せた。

「それで、何を書いたんだ？」

「何だと思う、メル？」

「ふむ……」

腕を組み考えるメル。他の二人も考え始めた。

——その後、自分の部屋に戻り、作文用紙を広げた私は、将来の夢について書き始めた。母さんの話を聞いたせいか、スラスラとペンが進んだ。何をどうしたいのか、全く考えること出来なかった私が、悩むことなく書いていた。現実に、ほんの少しではあるけど、厭世感を抱いていた私が、現実の将来について書いている。

不思議な気分だった。気がつけば、三十分もしないで書き終えていた。

初めて口を開いたのは、理子だった。

「……公務員？」

「私もそう思う」

「右に同じだ」

「……正解。なんでみんな同じこと言うかな」

もっと違う答えを期待していた私は、少し残念な気持ちになった。

「だって、葉音だもん。」

「何、その固定観念的発言は！」

「葉音だからだよ」

「おいおい、私は一体なんなんだ！」

「葉音ちゃん。」

「その通りだけ……まあ、いや」

このままだと、『葉音』のエンドレスが続きそうだったので、この話題を切り上げることを選んだ。

「いいじゃない、宿題を終えることが出来たんだから」

「そうだね。よかったね、葉音ちゃん」

「終わりよければ全てよし、だな」

「まあね。でも、一応夢は見つかったよ」

その発言に、みんなの顔がきょとんとする。そして、何も話さない。

「ぎ、ぎ、ぎ、どうしたの？みんな」

「いや、ごめん。あまりにも意外だったからさ」

「私も、葉音ちゃんが……何か見つけたって聞いて……」

「驚愕してしまったよ」

「……私って、そんなに変な奴なのかな」

「そ、そんなことないよ」

理子が、慌てて言う。私に悪いことしたと思っているのかな。

「葉音ちゃんは、葉音ちゃんだから！」

「……結局、葉音じゃないの」

「あ……」

知香のツッコミに、理子は黙り込んでしまった。その様子に思わず、私は笑った。

「何をやってんのよ、あんた達は」

「見事なボケとツッコミがなされているな」

「そういう問題じゃないと思うけど」

「お、葉音。あたいのボケにうまくツッコんだじゃないか」

「ボケだったのかい」

こちらでも、コンビが形成されてしまった。一体私達は何をやっているだろうか。

でも——こんなくたらないやりとりしているのも、幸せなんだよね——

「で、その夢とは？」

メルが聞いてきた。

「夢って言っても、くだらないものだよ？」

「葉音が決めた夢は、くだらないよ」

「えっ？」

メルの言葉に、私は驚いた。それに続くように、知香達はうなずいた。

「その人が決めた夢を、他の人が口出す資格はない。その人の人生を、他の人が決めてしまうことが許されないのと同じようにね」

「私も、メルちゃんの言う通りだと思う。葉音ちゃんがそうしたいと思ったことは、決して変なことじゃないよ。同じこと言っちゃうけど……葉音ちゃんは葉音ちゃんなんだから、きっと、その夢って言うのも、葉音ちゃんらしい夢なんだろうから。みんなと違っていても、それは立派な夢だよ」

「右に同じく、以下同文」

「おいつ、そこっ！」

みんなからツッコまれた知香は、腹を抱えて笑う。

「アッハッハッハ、冗談だって……。でも、みんなの言う通りだと思うな。夢って、その人が叶えたいから抱くもので、他の人がそれはおかしい、やめろとか言うのは、その人の行動を自分の価値観だけで見ちゃうことになるもん。限度があるにしても、その人の夢を尊重するのが、当たり前だと思うな」

「みんな……ありがとう」

私はいい友達を持ったなって、改めて思った。同時に、将来の夢を、絶対に実現してやろうって思った。

「それで、夢って何？」

「私の夢は……その……」

言おうと思った途端に、私は急に恥ずかしくなった。別におかしなことを言うつもりはないんだけど、いざみんなの前で言おうと思うと……

「おや？ 顔があかくなってるぞ？ 恥ずかしいのか？」

「べ、別にそんなんじゃないわよ。恥ずかしくなんかないわよ」

「おお、ツンデレがここにいた」

「ツ、ツンデレじゃないよ！」

「まあまあ。で、葉音ちゃん」

「う、うん……。私の夢はね……」

いつまでも、こうしていたいから。母さんと同じように、なりたいたいから――

「……みんなと、ずっといつまでも、仲良くいたい。友達でいたい……」

私に見つけない夢は、母さんと全く同じ夢だった。こうして、みんなと仲良く出来ることがとても楽しくて、嬉しくて、幸せだから。みんなと一緒にいたいんだ。

「……ご、ごうかな？」

みんなに聞いてみる。知香たちの顔が、少し赤くなっていた。

「い、いいんじゃないか？」

「すぐく……いい夢だと思うよ」

「そ、そうだな。立派な夢だな」

「みんな、恥ずかしそうな顔してるけど、もしかして、ツンデレ？」

「ち、違う！」

「私は、ツ、ツ、ツンデレなんかじゃないよ！」

「そうだそうだ！ デレになんかになってないぞ！」

「アッハッハッハ！ みんな必死じゃない！」

こんなやりとりが、とても楽しくて――

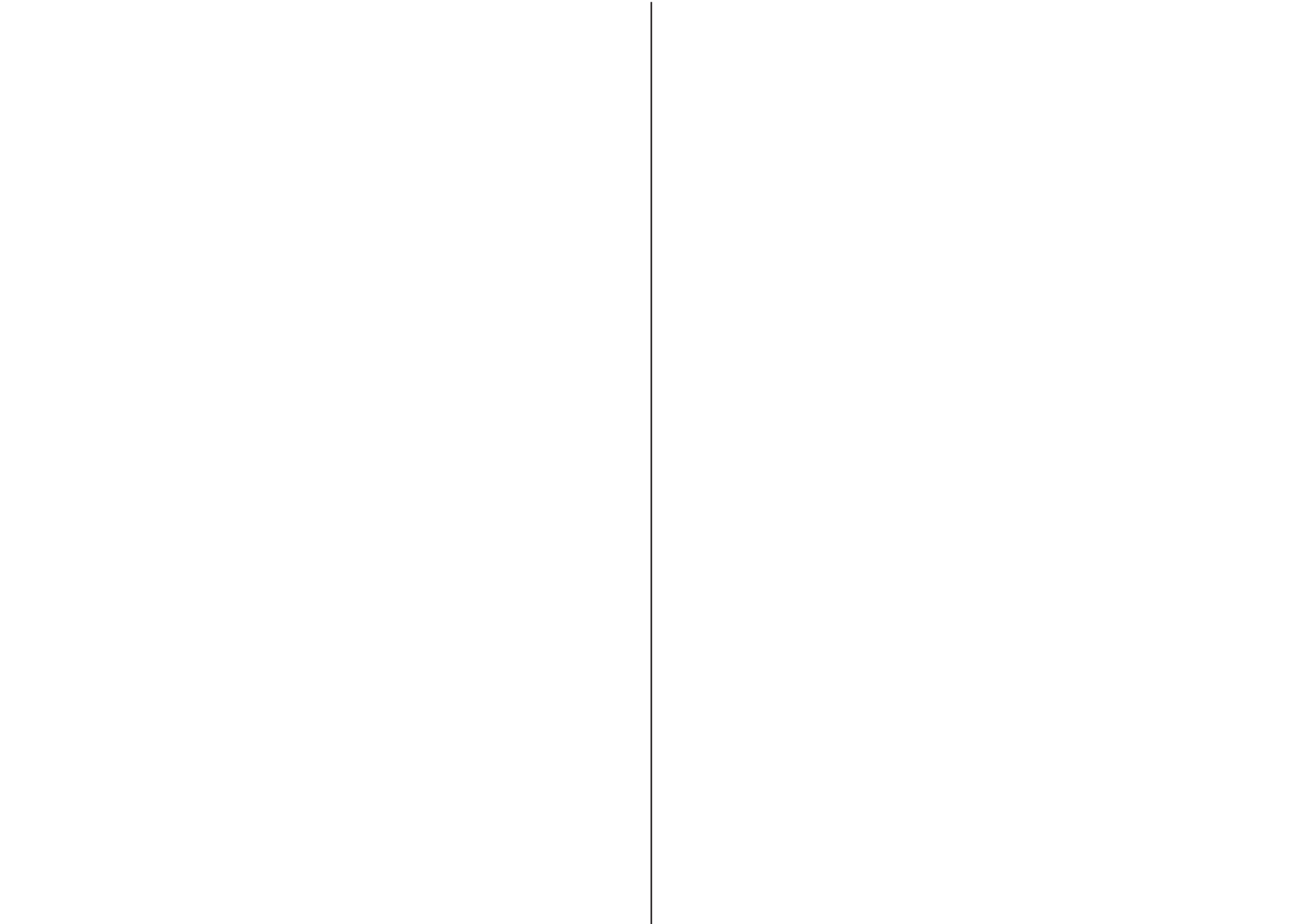
こんなやりとりが、とても嬉しくて――

こんなやりとりが、とても笑えて――

それが、幸せなんだ――

やっど気がついた。私は、これでいいんだって。こうしていいんだけど、私は現実には生きていることに嫌悪していない。

私は、現実が、嫌いじゃない――



どんなことだって、いいんだと思う

小島遊涼

赤身レコーズ二〇一一年